

熊本市のレストランに納入したミニ工場で育つレタスの様子を確認する高崎克也社長と妻の美佐子専務



AGL (アグリエル) = 阿蘇市

農業法人物語

2

南に五岳を望む阿蘇市の水田地帯でコメを作る。自社田25畝、田植えや収穫などの作業受託が7畝。栽培品種はコシヒカリなど6種類で、タイ料理店向けの長粒種も栽培する。高崎克也社長(56)は「お客さんの要望に合わせて作るのがうちのやり方」と話す。

コメは全量、農薬の使用を減らして有機肥料で育てる。30㍗では「紙マルチ農法」による無農薬栽培も。時間がたつと水に溶ける紙を広げながら苗を植え、雑草が生えるのを抑える。コメの販売

【事業内容】 コメの生産とライスセンター経営、繁殖牛飼育、植物工場のコンサルタント販売

【生産規模】 自社田・受託計32畝

【法人設立】 2006年6月

【従業員】 役員2人、社員4人

【売上高】 5000万円

コメ作り、植物工場のコンサル業も

はJAの共販を利用するほか、穀物商社や消費者と結び付いた契約栽培にも積極的に取り組む。

今季から水田の一角に水位や水温を測る機器を設置。ICT(情報通信技術)を活用して生産に最も適した条件をデータ化する国の事業にも参加している。

社名のアグリエルは農業(アグリカルチャー)に光(ライトのL)を当てたい、との思いから命名した。「農業を輝く未来産業にしたい」と語る高崎社長が近年、力を入れているのが植物工場のコンサルタント販売事業だ。法人化の1年前、高崎

社長は千葉県内のLEDメーカーの依頼で植物工場の再建を指導した。「農業の基本ができていない」。農業者が肥料や光量を設計する必要性を感じ、植物工場のコンサルタントや研究事業に乗り出した。

同社が画期的なのは、果菜や葉物だけでなく、従来は「不可能」とされてきたジャガイモなど根菜類の養液栽培も可能にした点。養液をつけたプラスチック製ビーズを敷き詰め、土の中と同じ状態を再現することに成功した。特許も持つ。

近年は中東などからも問い合わせがある。「海外受注も加速させ、環境に左右されない植物工場が世界の食料事情に貢献したい」(太路秀紀)